

第 12 期県民生活審議会 第 2 回県民生活部会 議事要旨

1. 日 時 令和元年 6 月 27 日 ( 木 ) 10 : 00 ~ 12 : 00
2. 場 所 ひょうご女性交流館 5 階 501 会議室
3. 出席者 委員 : 鳥越会長、小西部会長、川中委員、田端委員、千葉委員、野崎委員、服部委員、原委員、飛田委員、宮定委員  
ゲストスピーカー : 与布土地域自治協議会つながりの郷部会 馬袋 ( ばたい ) 部会長  
県側 : 松森女性生活部長、生安県民生活局長、岩原県民生活課長、宿南県民生活課班長、幹事課室ほか関係職員

4. 議 事

- ( 1 ) 「平成 30 年度参画と協働関連施策の年次報告」について
- ( 2 ) これまでの県民生活審議会での検討内容の整理について
- ( 3 ) ゲストスピーカーの報告・質疑応答  
与布土地域自治協議会つながりの郷部会長 馬袋真紀氏
- ( 4 ) 意見交換
- ( 5 ) その他

5. 主な内容

【「平成 30 年度参画と協働関連施策の年次報告」について】

内容についてのご意見等はなし。

【これまでの県民生活審議会での検討内容の整理について】

議論の方向性

\* 参画と協働の更なる展開について考えていくうえで、全体的に参画と協働が十数年前とどう変わってきて、今どんな方向にあるか、また何が変わっていないかを検証し、審議会において参画と協働のもう少し大きな流れを指摘する必要がある。

\* 自治会は最も地域密着型であったが、それすらも抽象度が高くなっている。そういった新たな流れの中で具体的な取組が生まれるので、こういった変化が将来どのような効果をもたらすか議論し、明らかにしていく必要がある。

「地域」が意味するイメージ

\* 「地域」という単語は、自治会や地域組織のイメージが先行し自由な発想を展開する足かせになっている。「地域社会の課題」という単語も、「社会の課題」と言い換えれば、視点が少し広がり、NPO 等の多様な人が参画しやすくなるのではないか。

\* 「地域コミュニティ」という単語も同様で、人と人がつながっていく、様々なつながりを「地域」に限定せず単なる「コミュニティ」として捉えれば、そこに多様な主体が参画し、色んな活動が生まれてくる可能性もあるので、担い手の不在や高齢化等を議論するときには、あえて「地域」を伏せることによって議論することも必要である。

\* かつての「地域」のイメージが変わり、より抽象度が高いものになりつつある中で、「地域社会」

の「社会」の方に視点を置くというのは、現実を踏まえたものである。

- \* 「地域」という言葉にも「リアルな地域」、「バーチャルな地域」といった新しい概念の萌芽があり、これからの時代に即している。審議会での議論を踏まえ、多くの人が理解できるような形で提供できればよい。

#### 【ゲストスピーカーの報告・質疑応答】

ゲストスピーカーの報告内容については別紙参照。

##### 質疑応答

- \* 朝来市全体で見て自治協議会の活動はうまくいっているのか。

市内 11 箇所の自治協があるが、高齢化率や商店、公共交通など状況が様々であり、地域によって温度差がある。それぞれの自治協議会において地域の課題を把握し、その状況に応じた活動を展開しているため違いが生まれている。

- \* 市から地域包括交付金などの補助金が出ているとのことだが、補助金等は地域活動の実施において不可欠であるか。

与布土自治協の一般会計予算にしめる交付金の割合が 3~4 割あり、事務局の人件費は交付金がなければ非常に厳しい。しかし、市や地域内団体の委託業務の受託など資金確保の努力はしている。

- \* 与布度地域は規模が小さくメンバー同士が face to face で多様な意見を理解し合える素地ができあがっているが、今後、他団体と連携する上で組織が大きくなれば難しくなるのではないか。

与布土地域は規模が小さくある程度課題が共通するため、やりやすいところはある。他団体とも地域の状況や課題に応じて、うまく連携し対応する方法を見つけていく必要がある。

- \* 地域の声の大きい人（組織の長で行政等とつながりが強い人）たちの対応はどうしているか。

そういう方も対話の場に入ってもらい、みんなの声が対等になるような場をつくっている。顔の見える小さな地域だからこそ、みんなが納得するまで話をすることが大事である。

#### 【意見交換】

##### 多様な主体の参画について

- \* 若者は Will（やりたいこと）と Can（できること）から地域活動を始めても良いという視点が大事であると感じた。Must（地域が求めていること）である課題解決を大きく掲げると、プレッシャーによりうまく進まないこともある。当然、最終的には課題解決につなげる必要はあるが、まずは Will と Can から始め、そこから取組を拡げていくというやり方もあり得る。新たな担い手と呼び込むためにはこれまでの発想を変えていく必要がある。

- \* 都市部の若者たちは、1つの場所に集まりそこで「つながる楽しさ」を享受するというよりは、いろんな場所にいる人々とつながってプロジェクトを展開しながら、「つながりの楽しさ」を得ていることが多く、組織化や活動の継続性が意識されることは珍しい。1つの場所で「つながる」から地域活動へと結びつけていく流れは都市部では難しいのかもしれない。そうであれば、都市部ではどのような展開を創り出すのかを考えていく必要がある。

\* 男性のシニア層は「仲間が欲しい」や「世の中の役に立ちたい、社会貢献したい」といった動機で活動しているが、「ちょっとお金も欲しい」というところもあり、少しでも現金収入につながればモチベーションもあがるのではないか。

#### 行政の関わり方

\* 都市部のゆるやかなネットワークやリゾーム型の活動といったものを、地域を動かしていく原動力に変えていくことも考える必要がある。また、行政は参画と協働のパートナーとして、従来の組織だけを相手にするのではなく、組織化されていない相手とも向き合う必要があるのではないか。

#### 組織のサイズについて

\* メンバー同士がお互いの考えを理解し、多様性を認識できれば良いが、規模が大きくなると難しくなることへの対処については、規模が大きくなったら枝分かれするとか、1人が複数のグループに入るなどの方法が考えられるが、結局はメンバー同士がお互いに知り合える場というのをいかに確保するかが重要である。

\* 地域づくりにおける組織の最適サイズは、個人と集団の関わり方によって変わってくる。

\* 自分の住んでいる自治会は 600 世帯程度あり、報告いただいたようなこと組織運営ができるか考えると、実際は難しい。

#### その他

\* 「若い人たちの参画」は一つのキーワードであるが、メンバーの固定化などによりそのうち保守化する懸念がある。また、従来の自治会と違うコミュニティを想定してつくられた自治協が、活動が続ける中で自治会と同じような組織になってしまう懸念もある。時間の経過により組織に起こり得る課題に対して、どのように新陳代謝の仕組みを取り込んでいくかが課題である。

\* 兵庫県は山間部と都市部が両方あり、地域のバラエティさという面で、参画と協働の取組も多様化しやすい地域ではないか。エリアの特性としてのバラエティさと同様、関わりのバラエティさみたいなものが、兵庫県の参画と協働の強みとして発信できればよい。

\* 地域活性化の一環で、空き家を活用したまちなか水族館の取組をすすめているが、地域の人、漁協や漁師さんの協力により、全てボランティアでやっている。この取組は可能な限り地域の人とコミュニケーションを図りながら一緒にやっている。新しいことに取組むには力が必要で、すぐには成果が出ず根気強く続ける必要がある。地域づくりは、地域住民 1 人ひとりの協力が必要で、これからも努力していく必要がある。

#### 【その他（事務局からの伝達事項）】

- ・今年度、県民意識調査及びボランティア活動実態調査を実施。結果は次回部会で報告予定
- ・第 3 回県民生活部会は令和 2 年 2 月か 3 月頃に開催予定

## 第 12 期県民生活審議会第 2 回県民生活部会

与布土地域自治協議会つながりの郷部会 馬袋（ばたい）部会長からの報告

- ・朝来市の与布土地域という自治組織で活動している。市役所の職員でもあり、市総合戦略の策定のほか、中高生を中心に、子どもから大人までの人材育成事業のプロジェクトも担当しており、十数年間朝来市の参画と協働の仕組づくりや市民活動の仕組みに携わっている。
- ・朝来市ではシティプロモーションとして、住民のシビックプライドを育ていき、その結果、自然と自分のまちを他地域の人に勧めてくれるような市民を増やしていくことを目的に、まちづくりを進めている。
- ・朝来市は 11 の地域自治協議会があるが、市が実施する市民アンケート調査の結果で、「自分の住んでいるまちを勧めたい」という項目で、与布土地域がトップになっている。与布土地域は朝来市内で高齢化率が 2 番目に高い地域で、さらに人口減少も進んでおり、条件的にはかなり不利な地域である。なぜ与布土地域の人たちが、自分たちの住んでいるまちを勧めたいか、どのようにその気持ちが育まれているのかについて、ご紹介したい。
- ・与布土地域は 10 集落、10 の自治会から成り立っている。住基上は 498 世帯約 1200 人の人口がいるが、大学進学等で子どもが出ていっているため、実態はその数字より人口は少ない。高齢化率は約 40% で、少子高齢化や人口減少といったものが深刻な地域であり、小学校も平成 22 年 3 月に閉校を迎えている。
- ・「自分たちの地域を次の世代に元気な状態でバトンタッチしていきたい」との思いから、平成 19 年に与布土地域自治協議会を設立した。協議会の設立にあたって、従来型の組織でなく、「地域の住民が一丸となって活動する」、「幅広い年齢層が地域づくりに参画できる」ことを目標に、皆が地域に出て、話し合う場を作っていこうということで、座談会を開催した。
- ・その座談会には若い人から、女性も参加していた。今では当たり前の光景だが、十数年前の与布土地域では、若い人たちや女性が地域の場に出て語るというのは考えられないことであった。それまで、女性達は疲弊していく地域の状況を見て何かしら思うことがあったが、自由に発言できる場がなかった。座談会で自分の思いをやっと発言できるという喜びが生まれ、グループで話していくうちに、さらに思いや気持ちを共有する喜びになっていった。
- ・座談会の終盤ではいろんな企画書づくりを行い、住民が「こんなことが地域であったら良いのにな」という座談会での個人の思いの共有が実際に地域の活動につながっていくという体験が得られた。それが、地域自治協議会への期待とあわせ、自分たちの手で地域を何とかしていきたいという思いに変わっていった。
- ・私は市役所の職員だが、自分もつながりの郷部会の部会長をしており、設立当初はいち部会員として参加している。市や市職員の関わり方としては、住民からみんなで話し合いの場を持ちたい、対等に話したいと要望があった際に、座談会の開催方法や場づくりを提案した。
- ・与布土地域自治協議会は 6 つの部会のほかに、与布土地域発掘プロジェクトという特徴的なチームを立ち上げている。部会はある程度専門性を持っているため、若いひとには敷居が高い。何かまちに関わりたいという人たちが、もっと気軽にまちに地域に関われるような、昔の青年団的な組織をつくることによって、若い人たちも気軽に、気楽に関われる場ということで立ち上げられた。
- ・部会はそれぞれいろんな活動をしており、かえるの郷部会では自然環境に係る取組から都市

部との交流事業などもある。ごくらくの郷部会では、与布土にある温泉を中心に観光振興に取り組み、みのりの郷部会では農業集落である与布土の地域特性を活かし、都市部との交流事業や県と受託事業進めたりとか元気な農業集落をつくる取組が行われている。はぐくみの郷部会では、与布土に小学校があったときに、地域の母親たちの学童保育を求める声が、そのまま自分たちで学童保育を実施するという形につながり、地域での学童保育がスタートした。今はそれがこども園に引き継がれているが、その活動支援をしている。また、こども園の園庭だけで子どもを遊ばせるのではなく、田んぼや川、地域全体が園庭であるという考え方のもとに子ども達を育てていきたいという思いがあり、そういった活動はどうしても保育士だけでは無理なので、地域の皆さんがそれを応援する形で支援している。すみやすい郷部会では地域の安全や福祉をテーマに活動しており、集落間の防犯灯の管理をしている。私が担当するつながりの郷部会は、スポーツを通じた住民交流の促進、地域の良さを発信するふるさと小包便の作成のほか、与布土発掘プロジェクトチームの取組も担当している。

- ・住民の困りごとや意向を把握するために、これまで3回全住民や全戸を対象としたアンケート調査を実施し、結果を反映して計画を見直している。その中であれもこれもやるのではなく、特に重点的に取りかかるべき3つのプロジェクト（若者の移住定住、農業振興、高齢者福祉）を進めている。
- ・地域の活動を欲求段階説に当てはめたときに、土台となる生活、安全安心な地域づくりはもちろん、各段階の活動を自治協議会の活動でしっかり補完しながら、私たちが目指す安心して自分らしく生き生きと暮らしていける地域の実現を進めている。活動を通して、私たちは地域に住んでいる人と人のつながりを大切にしながら、地域力を高めていくという取組をしている。
- ・自治協議会設立後の変化として、誰でも気軽に地域づくりに参画できるようになった。それまでは「肩書き」がないと地域づくりに参加できなかったのが、肩書き関係なく、誰でも参加できる場がある組織が出来たというのが非常に大きかった。また多様な人たちが参加するようになり、いろんな声がきちんと活動に反映できるようになった。
- ・自治協議会の活動が軌道に乗ってくると、ある程度の地域の課題を市役所等の公的機関に頼らず自分たちで解決するようになった。例えば郵便局やJA、社協など、複合的な役割を自治協議会が担うようになった。合併で市役所は遠くなったが、心の拠り所となる組織に、この自治協議会がなったと感じている。
- ・現在、市の包括交付金や県補助金をもらっているが、それは恒久的なものではないと考えている。そういったお金は投資的な使い方をし、後に自分たちの自主財源を確保できるような取組にしていこうという動きもある。
- ・私が一番大事だと思っているのが、いきいきとすること。自治協議会の活動に皆さんがいるんな形で参加しており、計画に携わる方もいれば講師で来てもらう方もいる。活動を通して皆さんが自己実現する場になっており、自分たちが持っているノウハウを地域の活動を通して還元できている。地域自治協議会の活動そのものが生涯学習の場になっているのが非常に大きいと感じている。
- ・担い手不足が叫ばれ、その原因として高齢化や人口減少がいわれているが、与布土地域において、担い手不足の一面はあるにはあるが、あまり感じない。与布土の状況と比較して、担い手不足と言われている理由を分析すると、大きく3つあると考えている。

- ・ 1つ目は情報の共有ができていること。この地域をどんな地域にしていきたいか地域住民に共有されているというのが大事で、共有されているからこそ、目標を達成するために自分たちができると携わろうという気持ちになる。この情報の共有がなければ、そういった主体的な動きも出てこない。
- ・ 2つ目は開放性と主体性である。地域自治組織の活動が誰でも参加できる開放性が備わっているか、それは仕組としてだけでなく雰囲気として、誰でも参加して良いよという場である。また、その場に参加したが、指示されるまま動くのではなく、自分がやりたいことを主体的に取り組める、主体性の確保が組織として出来ているか。
- ・ 3つ目としては組織への期待である。地域自治協議会を設立するとき、私たちはこういった活動をここで実現できる、こういった課題も解決できるといったいろんな夢や思いを込めて組織をつくった。どんな組織でも思いを込めてつくられるが、活動が上手くいかないときに、組織に対する期待がなくなり、参画する意味を見失い組織離れが起きてしまう。組織や活動に参画する意味合いとか、参画する楽しさがきちんと明確になっている、そういった組織づくりも大事なポイントである。
- ・ 参画する人たちにとっていきいきした活動につなげていくために、Will（やりたいこと）と Can（できること）と Must（地域が求めていること）の3つが重なるところで地域づくり活動を進めていく必要がある。Will と Can だけでは地域が必要としない、独りよがりの活動になってしまい、Can と Must だけでは、やらされ感が強く活動する人が全く楽しくなく長続きしない。Will と Must だけでは絵に描いた餅になってしまう。
- ・ Will、Can、Must が重なるところをどう見つけるか、それは対話の場で住民同士がコミュニケーションすることであり、与布土地域ではこれを設立から12年たった今でも大事にしている。
- ・ 地域づくり活動を進める上で、自分がやりたいことを納得してやるのが非常に大事で、対話を通して地域の課題が他人事から自分事につながっていく、自分の抱えている思いがきちんと伝えられる、若者も女性もみんなが対等に話せる、そういった場づくりが必要である。また、その場では、参加者が否定から入らず肯定的な姿勢で臨むことも求められる。
- ・ 与布土地域でも課題は山積しているが、新たな課題にあたる時には、前に進んでいる証拠だと言いつけさせている。メンバーは仕事に就いている人、子育て中の母親、高校生など多様で、それぞれ関われる時間帯や価値観も異なる。多様なメンバーの意見は、新たな気づきをもたらすものであり、それを排除するのではなく、認め合うことが必要である。
- ・ 自分が考えたことが具体的な行動につながることは、楽しい経験となり自信につながる。それを次の活動につなげていくボトムアップ型の地域づくりを展開していくことが必要である。
- ・ リーダーシップは必要だが、1人1人が役割と責任を持つことも必要である。地域活動を通して自分の価値を実感することが、住民の生きがいにもつながっている。
- ・ 活動に対するモチベーションを高めるためには対価が必要で、与布土地域でも活動に対する対価はある。しかし対価以上に大切なのは「ありがとう」といった感謝の言葉だと考えている。それらは活動した人への心の報酬になり、「やってよかった。次はこんな事をしてみよう」というモチベーションアップにつながっていく。
- ・ 地域の活動は良い結果がすぐに出るものではない。上手くいかなかったからダメではなく、取り組む過程をそのものが大事である。

- ・地域が何でもオールマイティにできるわけなく、他団体と上手く連携する必要がある。「全部自分たちでやってしまわないとけない病」から抜け出して、自分たちが出来ないこと、不得手なことを手助けしてもらうことが重要である。ファシリテーターや外部の視点といった中間支援的役割をもつ団体等や専門的な知識をもつ団体等との連携が望ましい。
- ・また、与布土地域の活動には移住を考えている人、朝来市内に移住したが与布土に住んでいない人、与布土を応援している人、与布土が面白そうと思った大学生など様々な人が参加している。多様な人たちが自由に参画できるのがポイントで、そういった人たちから刺激を受けながら、地域の人たちもますます元気になっている。
- ・多様な人たちの参画を得るのに大事なのは口コミだと思っている。誰でもいつでも参画できる仕組みがあって、実際に参画を呼びかけてもなかなか人は集まらない。イノベーター理論によれば、実際に参画につながるのは、既に参画している・したことがある人の口コミや声かけである。
- ・花巻市のコミュニティアドバイザーの役重氏によれば、地域自治協議会の活動というのは、「地域自治」という最後の1人の声を大切に作る側面と、「地域づくり」という最初の1人の「これやってみよう」という声を大切に作る2つの側面がある。両方の側面を大切に作る、また、場合によっては使い分けながら地域の活動等を進めていく必要がある。
- ・与布土地域ではわくわくキャンプという子どもが参加するイベントを企画運営しているが、その企画の打合せの場には、30代40代の男性、高校生、大学生、30代40代の女性、消防団のメンバーなどが参加している。当日のスタッフは35名集まったが平均年齢が20代で、若い人達の参画が非常に多い。
- ・若い人が集まるには、「楽しい場」「共感する場」「開かれた場」の3つのポイントが不可欠である。楽しい場というのは複数の側面があり、例えばやりたいことが実現できる場であること、居心地が良い場であること、自分の役割があること、仲間がいること。共感できる場というのは、活動に対しての共感や活動をやりたいと思っている人の情熱にしたいと共感することなどである。開かれた場であるということは、誰でもいつでも参加できるということ。
- ・与布土地域でのやり方の一つは、飲み会をしているが、ここで人と人をつなげている。そして、自分がこの地域で何をしたいかを自然に言えるような場にしている。ある人が「こんな事やってみよう」という「それ面白そう、やります」と、この指止まれ方式でつながっている。興味ない人は参加する必要はなく、気軽に自分がやりたいとでき、それを応援してくれる、一緒に進めていく仲間がこの場でできている。
- ・先程 Will、Can、Must について説明し、3つが重なる部分で地域活動を始めると説明したが、与布土地域では若者の活動について must の部分はあまり意識しなくて良く、地域で活動しているからこそ Must はあとからついてくると思っている。Will の部分「私はこんなことしたい。出来ないかもしれないけどこんなことをしてみたい」というチャレンジ精神をすごく大事にして、それが出来るように皆で応援している。そうすることで、若い人の更なるモチベーションにつながる。
- ・地域に参画するきっかけはシニア層と若者層との大きな違いがある。特にシニア層は与布土地域を何とかしたいという使命感や区長になったから、誰かにお願いされたから参加するといった義務感が強い。若い人たちは「ちょっと面白そうだから、参加する」と気楽である。
- ・シニア層は課題解決型志向に対して、若者層は未来創造型志向であると感じている。どちらが良

くて悪いというわけではなく、違いがある事をお互いが認め合うことが重要である。

- ・お互いを認め合うためには、若い人たちの活動や思いを、きちんとシニア層の方に伝わる言葉で翻訳をしていく役割がすごく大事で、それにより若い人たちの活動の公共性、公益性が理解されて活動しやすくなっている。
- ・「好きですふるさと与布土、つくります未来の与布土」をキャッチフレーズに12年間活動してきた。ここで暮らす誰もが、笑顔で、楽しく、生き生きと暮らせる地域づくりをしていきたい。そうした中で地域の困りごとを自分たちで解決していく、それを義務感とかやらされ感ではなく、自分たちの課題を自分たちで解決していく、そしてそれを地域経営という考え方で地域づくりを展開していこうと考えている。
- ・現在、農業、福祉を中心とした課題解決については、与布土自治協議会の傘下になるかもしれないが、独立した法人組織をつくって、きちんと経営していこうという形で進めている。
- ・与布土地域自治協議会は今、地方自治法上の認可地縁団体の法人格を取得しているが、法人格の中では丁寧に丁寧に重ね合意形成を取っていく必要があるが、一方で経営感覚を持ってスピード感を持って進めていく必要がある部分については、新たな法人格等で事業を興して、地域の課題を解決していきながら進めていこうとしている。
- ・与布土地域の人たちが「自分のまちを勧めたい」のは何故かと考えたときに、「参画と協働」を超え、住民の暮らしと地域が活動を通して一体化していることが理由としてあげられる。暮らしと地域の一体化によりシビックプライドが醸成された結果、「まち=わたしたち」という意識づけにつながっているためであると感じている。